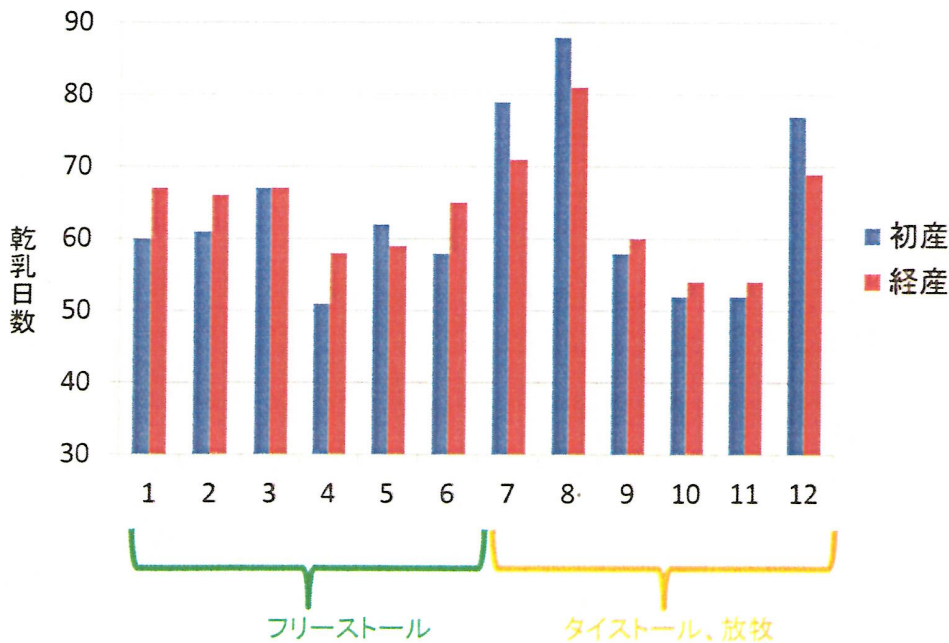


～ 乾乳期間 ～

乾乳期間は何日に設定していますか？実際の農場における乾乳日数の長短による乳量や繁殖の違いを調べてみました。

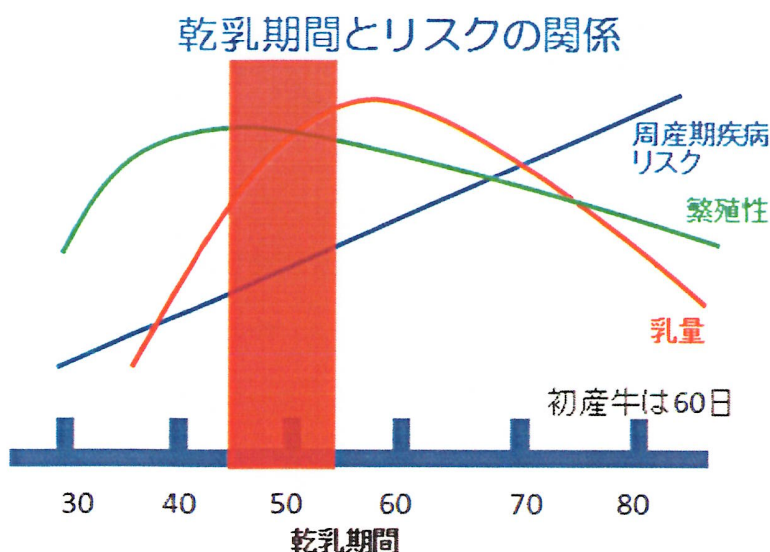
下記は各検診農場の平均乾乳日数です。多くの農家さんが乾乳期間をなんとなく 45~60 日に設定されていますが、乾乳期間が大幅に延長している農場も見られます。



分娩が予定日より早まったり遅まったりもしますし、泌乳後期の低泌乳や乳房炎、ストールの都合上早めに乾乳にする牛も出てくるでしょう。特に搾乳できる頭数に制限のあるタイストールの場合は分娩が偏ると早めの乾乳を余儀なくされます。乾乳期間をどれだけ取るかについては過去に黒崎先生がマネージメント情報にも書かれており(2010 年 12 月号)、次乳期の生産性のことを考慮すると一般的には経産牛で 50 日前後、

初産牛はまだ成長過程でもあるので、しっかり 60 日の乾乳期間を確保することが良いようです。

しかし、もちろん月ごとの分娩の偏りによるストールの空き状況や、牛のコンディションによっても乾乳期間は左右されてきます。乾乳が長くなったとき、短くなったときにそれが意図して調整されているものなのかどうか重要だと思います。



乾乳期間	メリット	デメリット
なし	周産期病減少傾向あり 分娩前後の乳房炎減少 乾乳牛舎いらない	初乳が取れない 飛出し乳量は低い 乾乳期治療不可
長い(60日以上)	BCSの低い牛には良い 過搾乳していた乳頭を休められる 双子分娩に備えられる 飛出し乳量高め	移行期の管理が難しいかも 周産期病増加傾向 十分な乾乳施設が必要
短い(30～45日くらい)	乳量はほぼ変わらない 3産以上の牛では推奨される 周産期病減少傾向 乾乳施設の面積を減らせる 1群管理向け	双子分娩の牛にはキツイ 初産牛には不向き 分娩予定日より早く分娩した場合の乾乳軟膏による出荷不可

さて、各農場の平均乾乳日数は前出の通りですが、一つの農場内の各個体の乾乳期間にはバラツキがあります。各農場の乾乳期間のバラツキが戦略的なものなのか、繁殖成績に伴うものなのかをみてみました。通常、分娩間隔の長い牛、すなわち空胎日数が長く、受胎が長引いた牛は乾乳期間を一定に保っている場合、搾乳日数が比例して伸びるはずですが。しかし下記に示した通り、乾乳日数はむしろ分娩間隔との関係が極めて高く、分娩間隔の長い牛は搾乳日数ではなく乾乳日数だけが延びていきます。これは農場内で分娩間隔が延びた牛が泌乳後期に低乳量に陥るため、農家さんが意図せずに予定より早めに乾乳にすることで乾乳期間が延びるために起こる現象です。

乾乳期間	Pct	Count	Av DDRY	Av305ME	分娩間隔	搾乳日数
47	24	67	51	11982	375	324
57	23	66	57	12218	376	319
62	27	76	62	11717	399	337
83	26	72	83	11371	422	338
=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====
Total	100	281	64	11805	394	330
By DDRY	Pct	Count	Av DDRY	Av305ME	Av CINT	Av PDIM
46	21	19	48	10471	392	347
57	27	25	58	10756	416	359
63	26	24	63	10837	424	362
91	25	23	91	9937	467	376
=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====
Total	100	91	65	10456	428	363
By DDRY	Pct	Count	Av DDRY	Av305ME	Av CINT	Av PDIM
42	22	65	44	11593	389	347
53	26	79	53	11972	402	348
58	26	77	58	11944	402	344
81	27	80	81	11787	427	346
=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====
Total	100	301	60	11837	406	346

また、これらの農場の乾乳日数別乳量を見てみると 50～60 日あたりの乾乳期間で次乳期の乳量が最大になっており、乾乳期間が延びるほど次乳期の乳量が低下していくことがみてとれます。

乾乳期間と繁殖・乳量は密接に関係しており、繁殖成績が良好であるからこそ乾乳期間を調節でき、次乳期の生産性をより高められる可能性が出てきます。現在良好な繁殖成績をあげている農場では一度乾乳期間を見直してみてもいいかもしれません。